

大江千里集小考

——句題和歌の成立をめぐる——

詳しい事は鈴木修次氏の『漢魏詩の研究』・森野繁夫氏の『六朝詩の研究』に述べられているが、漢代までは「とかく孤独の自己において作られがちであった」（鈴木氏著553頁）中国の詩は、魏晉の時代に大きな質的転換とともに自己増殖をも成し遂げ、詩壇の出現によって発芽した集団文芸としての制作形態は、賦の影響下における題材の拡充を伴って、六朝期に楽府体・詠物・詠史等のジャンルを多彩に開花させる。楽府・擬古の一変種ないしは発展型とも言うべき句題詩もそうした個人の文学から集団の文学への移行の裡に生まれ、六朝から初唐の間、とりわけ梁・陳の時代に数多くの作品を残している。

一方、これらを受容した日本の詩は、公宴や王公別業の会席を主要な制作の場とする点、六朝・初唐的環境を当初から備え、それ故にまた、初期において詩本来の述志的品格は既に稀薄であり、個我の主張・性情の吟詠は底辺に沈滅する。性格上述懷言志の対極にある題詠は奈良朝にも実質的には行われていたと想像さ

吉川 栄治

れるものの、現存資料からは概ね詠物詩に限定されるところおぼしく、素材の幅を格段に拡げるのは平安初頭期であって、その結晶としての勅撰三集の内実は、同和賦詠の類繁化を通じて詩作の一層の集団化・題詠化への傾斜を強めて行く事情を物語っていると同時に、貪欲かつ雑然と中国詩の方法が吸収されている状況を映し出しているのである。

やがて、初頭詩の闊雲な試行の中から句題詩が抬頭し、詩界は平安中後期の句題全盛時代へと推移する。その背景には、宮廷における「出_三於経籍奥理」（作文大体、按題）だす実題の支配的な状勢から、特に三月上巳・七月七夕の復活、その他随時の行幸雅会を見る宇多朝_一一つの画期として「懸_三於風月浮花」（同前）る虚題の優勢へと進む土壌の上で、花鳥風月を弄する応用範囲の広い句題が、題材面の柔軟性に欠け日本の風土からも遊離する詠史や楽府を押し退けて、他を圧倒する過程を指摘する事が可能だろう。我が国の句題が、中国のそれと較べれば、季の景物に密着

した即物性を強く滲ませているという際立つた特徴を持つ（陳代の句題「長笛吐清氣」「落落窮巷士」「桐鄉當軒轅」等は王朝句題詩には無縁のものである）事も、句題という形式の日本的詩精神への適応性を示しているよう。

ともあれ、句題詩が量的にも膨張する宇多朝を経て醍醐朝ともなるとその盛行は更に甚しく、定例・臨時を問わず宮中の遊宴ではその過半に句題が用いられるに至る。他方この朝の雅事に和歌の進出のめざましい事は村瀬敏夫・橋本不美男氏の指摘があるが、公的な舞台で詩と歌とが肩を並べた時点で、未だ二義的なあり方に甘んじながらも、時として歌が詩とその方法を共有する場合も生じた。

清涼殿の南のつまにみかは水流れ出でたり。その前栽に松浦沙あり。延喜九年九月十三日に賀せしめ給ふ。題に月に乗りてさゝら水を弄ぶ。詩歌心にまかす。

もゝしきの大宮ながら八十島を見る心地する秋の夜の月
（西本願寺本躬恒集）

「和漢任意」は句題が和歌の世界へ著しく接近している事によつて可能となる。謝靈運の句「乗月弄潺湲」（文選十三「入華子崗」是麻源第三谷）の喚起する清涼な影像とはやや裏腹に、題の未消化を示す躬恒の歌は、それだけに句題という方法に習熟しない初期の様相を偲ばせるものの、句題の和様化傾向という条件の下で和歌による詩境の追体験が図られる段階までには達しているのである。句題詩の隆盛と和歌の宮廷への復帰、その両者の交差する所に句題和歌という特異な形態も起こりえたと言えよ

う。

夜の雲収まりて月行くこと遅しといふ題を人のよませ給ふ

あま雲のたなびけりとも見えぬ夜は行月影ぞのどけかりける

（貫之集九）

千載佳句上四時部「秋夜」・和漢朗詠上秋「月」に載せる鄧展の零句「夜雲収尽月行遲」に基くこの歌は、しかし先の躬恒の場合とは幾分區別すべき「場」に成ると思われる。具体的な作歌事情は不明と言うよりないが、詞書の「よませ給ふ」を捉えて若干の臆測を加えるならば、貫之集中の同様の詞書を持つ十一例（古典全書「土佐日記」所収歌仙家集本に付す番号で示せば、696 706 709 731 734 736 756 791 802 859 862）中七例までが忠平・実頼ら父子の依頼に係る所から、前掲の歌も貫之集に夥しい屏風歌や交渉の跡を見る忠平一門に関わるものかと想像され、詠作年代も延長以降、忠平家との関係の緊密な貫之晩年の事と看做しうる。土佐日記一月十七日条には買島の「櫓穿波底月・船庄水中天」（全唐詩七九二「過海連句」）を踏まえた歌、

水底の月の上よりこぐ舟の棹にさはるは桂なるらし

影見れば波の底なる久方の空こぎわたる我ぞわびしき

が原拠句とともに置かれているが、恐らくは土佐日記の最も親密な読者であつたろうと推測される実頼・師輔らが、いずれかの折に、そこに示される和漢並列の趣向を想起し、座興的試みとして鄧展の句を和歌に移し換えて即吟させたのが「あま雲の」の歌ではなからうか。躬恒の場合は詩歌同題という条件下での句題詩に

対する和歌の対抗意識をも付度しうるかもしれないが、貫之歌の直訳の内容は、むしろ佳句への関心が先にあり、歌はその拘束を全面的に受けつつ詠じられているという状況を示唆するものと見るべきだろう。躬恒の歌が、題意への忠実さは欠いたとしても、「百敷」と「八十島」の対比を軸にまがりなりにもその場の情趣の形象化を企図しているのに対して、この方は詩句への補完的機能を受容面で要求されているように思う。

右大臣家つくり改めて渡りはじめける頃、文作り歌など人々によませ侍りけるに、水樹多佳趣といふ題を

すみそむる末の心の見ゆるかなみぎはの松の影をうつせば
句題和歌制作が漸く一般化してきた時代を承ける拾遺集に採ら

れた（雑賀1175）この敦忠の歌も、詞書に従えば詩題を準用したもののようだが、躬恒歌同様題の規制は緩く、祝賀の心を第一とした詠みぶりである。ともあれ、敦忠・貫之の興じた天慶以前に句題和歌がその舞台を撰閑家へも拡げている事と併せて、一口に句題和歌と言っても、成立期のそれは同一形態の中に相異なる因子を孕んでいる事を先ず指摘しておきたい。

ところで、これらに先行する同種の作品に、寛平六年成立の大江山里集、昌泰年間と推定されている紀師匠曲水宴和歌、延喜六年の平貞文歌合がある。しかし、後二者についてはその事実性自体が極めて疑わしく、殊に曲水宴歌は歌そのものも古今集時代一般の歌風を脱化したような不自然さを窺わせ、題の性格や用語その他の点にも多くの疑問を残しており、貞文歌合ともども、これを成立期の句題和歌資料として取り上げるには大きな不安があ

る。なお慎重な検討を要するものと言わねばならない。

ここで問題となるのは千里集である。千里集は句題和歌の嚆矢として諸種の文学史の上で言及される事の多い作品だが、前述したような成立期の作品群の中にあつてどのような位置付けをしようものだろうか。その収める和歌に関しては、例えば小沢氏が「いわば個人の机上の作であり」「題詠」という意識が希薄である」（前掲者）と言うごとく、後世的概念での句題和歌とは少なからず質を異にする。一例を引こう。

鶯声誘引来花下

鶯のなきつる声に誘はれて花の下にぞ我は来にける

うちかへし鶯誘ふ身とならむ今夜は花の下に宿りて
（千里集春部）

（拾玉集二）

千里の歌の翻案的態度、和歌としての自立性の乏しさは、同題に基づく慈円の作に見る逆転的発想に立った想念的抒情世界の創出と顕著な対照をなす。千里集全体を貫く右のような生硬さ、ぎこちなさに対しては従来時代的限界なり千里個人の和歌的力量に帰して説明されているけれども、先に述べたような初期「句題和歌」の詠法上の「揺れ」を考えれば、むしろ根本的に作歌姿勢が異なるものと解すべきだろう。当時の句題詩を見ると、七言句題は千里集のそれと唯一共通する「鶯声誘引来花下」（菅家文草六）と「黄菊残花欲待誰」（田氏家集下）、後にも「醉時心勝醒時心」（本朝麗藻下、藤輔尹）を数える程度であり、中国でも殆ど例外なく五言句であつて、千里集中三分の二までが七言句を

付すのは、その意味でも躬恒の例が端的に示すような詩における句題という方法の和歌への直接的移植とは考えにくいのである。

即ち「中国の擬古」→日本の句題詩→「句題和歌」という単純な詩歌間の交渉の図式で処理しうるものとは思われず、原詩句の佳句の性格の著しき、詩歌の等価関係は前出貫之歌との近似性を印象づける事柄と言えよう。但し、貫之のそれが具体的な「場」を持つ単発的作品であったのに対し、権力者の要請によってではなく作者自身の発意に係る、前後に例を見ないような整然とした部立を持った組織的作品である点に大きな隔たりがある。このような異種の作品を生み出した時代の潮流と、その文学としての本質とが、改めて検討されねばならないだろう。

先ず、作者千里について触れておく。生没年時は明らかでないが、官途や古今集の歌、

題しらず

白雪のともに我が身はふりぬれど心はきえぬものにぞありける
(雑林 1065)

やまひにわづらひ侍りける秋、心地の頼もしげなく覚えければ、よみて人のもとにつかはしける

紅葉ばを風にまかせて見るよりもはかなきものは命なりけり
(哀傷 859)

から、死没は延喜四五年頃、遡って出生は嘉祥から貞観初め頃と見てよいだろう。閏歴には見るべきものはない。平城天皇の曾孫で秀才の初めという江相公音人を父に持つにも拘らず、詩文の類

を殆ど遺さず、記録に残る極官も延喜三年の兵部大丞（古今集目錄・中古歌仙三十六人伝。勅撰作者部類には「六位兵部大丞」と卑官に終始している。千里を沈淪の歌人と把える山口博氏の観方はその限りでは誤りではないが、官位の不遇と作歌活動との因果関係は必ずしも分明ではない。

尊卑分脈や大江氏系図によれば、千里の兄弟には公幹・玉淵・宗淵・染淵・千秋（系図にはない）・千古の名が見え、千里はその三男である。この内宗淵・染淵・千秋については事績は不明。残る三人の内、長兄公幹は従五位下、次兄玉淵は従四位下、末弟千古は従四位上まで進んでいる。三代実録を見ると、公幹は貞観十四年五月廿五日鴻臚館において渤海国使に勅書を賜う任にあたり、元慶元年九月廿六日の「任大嘗会御禊装束及前後次第司」の際には、前次第司長官に任じられた父音人とともに後次第司次官を拜任している。また公幹・玉淵ともにそれぞれ仁和二・三年の白馬節会に陪席、賜禄に与り、同元年四月一日の公宴、同二年踏歌節の賜宴にも名を列ねる。この外、菅家文草七「鴻臚贈答詩序」に言う「二大夫両典客与客徒相贈答同和之作首尾五十八首、更に言う「二大夫両典客与客徒相贈答同和之作首尾五十八首、指加三江郎中一篇、都應五十九首」の「江郎中」が恐らく公幹を指すと思われる。元慶七年夏、七歩の才を称される渤海使裴璉との応酬に際して末席に加わる詩才を示している。これらによれば、公幹は大内記・中務少輔・少納言・侍従・右少弁、玉淵は兵部少丞・式部大丞・少納言等を歴る。千里の履歴は大学々生（目録）から始まって、元慶七年十一月の備中大丞（三十六人伝）が初任だが、千里集序に記す寛平六年（類従本）の散位従六位上（書陵

部本⁽¹⁾を除くと、延喜元年三月中務少丞（目録）まで資料上官歴の空白があり、その間二十年近くを費しているのである。なお、式部大輔にまで昇った千古について諸書に伝える事績を拾うと次のようである。

・宣^レ令^下左少弁橘朝臣公材問・散位大江千古方略試之策と者。

（類聚符宣抄九方略試問者）

・秋日陪^レ左丞相城南水石亭・祝^レ藏外史大夫七旬三秋^二応^一教

（雜言奉和・日本紀略）

・新国史曰、於^二宣陽殿東廂^一令^レ初講^二日本紀^一……特召^二……式

部少丞大江千古……等^二令^レ預^二講座^一焉。

（釈日本紀一）

・上^二醍醐天皇^一請^レ賜^二諡号^一于僧正空海^二奏^一。

（本朝文集卅三）

・延喜聖代千古維時親子共為^二文集之侍読^一。

（江吏部集中人倫部）

類従本句題和歌増補部分にある贈答

罪なかりしかども、人の事につきてしばらく籠居すべき
よしありし頃、式部大輔のもとへこまやかに申し送りし
文の奥に

都まで波立ちくとも聞かなくにしばしだになど身の沈むらむ
返し

千古朝臣

沈む身と聞くから袖に波かけてうしろやすくはいかで思はむ
の「都まで」の歌が集末尾の詠懐十首中にある所から、「正五位
上相当の式部大輔に寛平六年前に任ぜられている」末弟の千古に
さえ千里の官歴が後れていたとする山口氏の言は、延喜元年九月
の前掲大蔵善行七句の算賀の折の千古の官位が散位正六位上、同

四年に始まる日本紀講の際に式部少丞である事を見ても、明らか
な失考だが、それにしても、公幹・玉淵・千古いづれも儒門の出
身として順当な活動の跡が窺われ、かつ、玉淵の子朝綱・千古の
子維時が相並んで文章博士の職を占め、学界の一方の旗頭である
江家の基盤を固めた事とも思い併せると、やはり千里が儒門の一
員としての来歴では一等劣っている事は否むべくもない。

その反面、寛平后宮歌合・是貞親王歌合に出詠し、古今集の十
一首を初めとして計二十九首を勅撰集に採られ、三十六人撰に洩
れた事をも不審とされる（袋草子雑談）ほど、歌人としての千里
は精彩を放つ。千古は勅撰集歌人、玉淵も大和物語（百四十六段）
や著聞集（五）の逸話から歌才のあった事は知られるが、千里の
場合、儒家としての経歴の貧しさと華やかな作歌歴とはあまりに
対照的である。官歴の不如意と高い歌人の声名——所謂専門歌人
ではないが——、その両者の懸隔に、大江千里集という特典な作
品の生まれた理由の一端を見出だせるように思う。この作品の持
つ和嘆折衷様式が、儒者歌人千里の位相を何よりも浮彫りしてい
るのではなからうか。

なお、類従本句題和歌末尾増補歌の中に二首の句題和歌が見出
だされ、千里集と関連して注意を惹くが、その資料的信憑性はか
なり疑わしいものである。この増補部分は主に寛平后宮歌合・勅
撰集・古今六帖に拠り、その外十三首程度の原拠不詳歌を載せ
る。「文保二年六月四日 参議藤判」と著す奥書によれば、「彼人
一世之詠歌雖^レ可^レ有^二数首^一依^二隔^二時代^一今見稀。此後歌者吾^レ隨^レ
所^レ見書^二加之^一」えたと言うが、后宮歌合・六帖などは現行本と

は異なる伝本に拠ったのか、数首の読人不知詠を含み、その抽出態度も極めて蕪雑である。秀歌例として歌学書に引かれる事の多い「月見れば」の歌が洩れている一方では重出歌も存し、貞文の歌（古今秋下29）の上句と千里の歌（同271）の下句を合成したもののや、貫之集にある歌の改作歌も見える。詞書にも不可解な記述が多く、前述のように千古の官歴に矛盾したり、千里の極位に抵触する記事もある。従って、二首の句題和歌にしても、この集の内容に牽かれた附会と見て差し支えないだろう。

千里集のような特異な作品が構えられる背景には、当時の時代的風潮とともに、何らかの個人的動機が働いているのではないかと想像される。以下、集巻頭に付された奏状を手掛りに千里の意図を探ってみたい。

臣千里謹言。去二月十日参議朝臣伝勅曰、古今和歌多少献上。奉命以後魂神不安。臥重病延以至今。臣儒門余孽。側聴言詩未習艶辞。不知所為。今臣纔搜古句構成新歌、別亦加自詠十首。惣百廿首。悚恐震懼謹以奉進。豈求駭目、只欲解頤。千里誠恐懼謹言。

（類従本序記奏状）

これによれば千里の受けた勅諭は「古今和歌多少献上」である。

「古今和歌」は

昔延喜之御宇、属二世之無為、因三人之有慶、令撰進万葉

外古今和歌一千篇

を貫之集で「延喜の御時、倭歌知れる人をめして、昔今の人の歌

奉らせ給ひしに」と言う通りで、千里個人の旧詠近作と考えるのは幾分穿ち過ぎの気味がある。ただ、書陵部蔵中務集に、

円融院の仰言にて古歌奉りしに

今更に老いのたもとに春日野の人わらはへなる若菜つむかなとあるのは中務個人の旧藻を求められたもののようだが、円融院御集の同歌には「中務に歌えりてまゐらすべき由」云々とし、西本願寺本中務集にも単に「歌」と記すから、これは特殊な用例と考えてよいだろう。ところが、「古今和歌」の求めに対して、千里は「新歌」を奉っている。

新歌百許篇率皆鄙直如偶語

（詩品魏文帝項）

の「新歌」は魏文帝曹丕の新作、楽府を指す。しかも、千里集奉献の際と考えられる古今集998（千里集詠懷にある）の詞書にも、「古歌」ではなく「歌奉りけるついでに」とある。敢えて勅意から逸脱した千里の行為には、それなりの主張があると思ねばならないだろうが、その理由を千里自身は次のごとく述べる。

臣儒門余孽。側聴言詩、未習艶辞。

「余孽」は、例えば錢起の詩に「長纓繫余孽」（全唐詩二二六「送薛判官赴蜀」）というように、賊軍の殘党の謂で使われる事が多く、あまり好ましい語感を持つ言葉ではないようである。

.....

曉花半綻唯詩草 春鳥高歌是頌声

更有儒門余孽在 還慙暫忝茂材名

（扶桑集九、題詞作者名欠）

の場合にも明らかな謙辞であり、「以言以儒林枯株之身接詞苑

清華之召」(本朝文粹九、江以言「暮秋陪左相府宇治別業一事」)に通じる意識ではある。しかし見方を違えれば、謙退の裏には儒門の一員としての微かな矜持も感じられよう。そして儒門のひこばえ故に、「側聴言詩、未習艷辭」と言う。「言詩」は

臣十五歲加冠而後二十六、對策以前、垂帷閉戶涉獵經典。雖有風月花鳥、蓋言詩之日少焉。(首家後集貞亭坂本增補部「猷家集」表)

蓬宮芸閣賜宴之筵必蒙其微辭、王公卿相言詩之座必列其

風塵(本朝文粹六、以言「請特蒙天恩因准先例依

儒學勞被兼任升官欠左右衛門權佐申他官替狀)

命飲言詩忘俗境(本朝麗藻上、公任「四月末全熟」)

九歲始言詩(江吏部集中人倫部「述懷古調詩」)

のように、詩作あるいは詩の朗吟の意。従って、賦詩の知識もしくは詩筵に列席した経験語り、詩文の素養への自負を示す口吻をのぞかせているのだらう。一方「艷辭」については、謝靈運の

「山居賦」(謝康樂集一)に

覽者廢張左之艷辭、尋台皓之深意。去飾取素儻值其心耳。

とあるのによれば、張協・左思の京師の景觀を賦した艶麗な美文を「艷辭」と称するが、それは「飾」に当たり「素」に反し、「深意」に對立するものとして扱えられる。また、文心雕竜には

其衣被詞人非二代也。故才高者苑其鴻裁、中巧者獵其艷辭、……(卷一弁駁)

と、屈原・宋玉から後代の詞人の盗んだものがその「艷辭」であったと言う。いずれも文章表現に関わる字義であり、「審知天縱、艶藻神授」(夜雲集序)も同様の例。しかし、これが直接に千里の和歌観に結びつく訳ではなく、千里のそれは「艶情」に属する「艶詩」「艶歌」「艶曲」の世界を通過した措辞とするべきだろう。古今集真名序に言う「浮詞雲興、艶流泉涌」は「映綺靡於艶流」(文秀麗集序)とは自ら次元を異にし、仮名序での「あだなる歌」に對應する。「実質の乏しさ」という意味では前者の「艶」にも通じるものの、ここでは既に恋の分野に立ち入っている訳である。そこに示される古今和歌観は「以花比実、今人情彩剪錦多述可憐之句、古人心緒纖素少綴不整之艶」(新撰万葉集上巻序)・「今之所撰玄之又玄也。非唯春霞秋月漸艶流於言泉、花色鳥声鮮浮藻於詞露」(新撰和歌序)にも見るように、六朝詩論の影響を受けて儒教的政教意識を土台として規定されているが、わけても

文之無用者、雖美雖艷略而剪之。義之有実者、雖米雖塩細而言之之

(都氏文集五「策三文章生菅野惟肖」文二条)中「弁論文章」

のごとき姿勢を見れば、千里の言う「艷辭」が、明確に中国的文章観に立った儒者としての自己指定から来る語であると知れる。その立場から発言すれば、和歌は一括して「艷辭」なのであろうし、また当時和歌の置かれていた状況を反映する言葉なのもある。古今集目錄素性の項に、寛平八年閏正月六日の字多の雲林

院行幸に関する記述中、「菅根序云、于、時左丞相藤公談、前言往行、兵部尚書奏、米竹管絃、權律師由性（素性の兄）献、風流艶藻」とある。昌泰元年の御幸時にも由性は歌を奉っている（菅家文章六「和、由律師献、桃源仙杖、之歌」）が、菅根の序は千里同様當時の漢詩文家の和歌への意識を窺わせるものとして注意されよう。既に平安初頭の勅撰詩集において「艶情」が一部門を成すにも拘らず、千里集がそれを踏襲せず、艶詩句をも一切採っていない事も軽視できない。「臣儒門余孽、側聽言詩、未習艶辭」は單なる謙退にとどまらず、儒者としての本分を断る一種の自己発揚と見てよいのではなからうか。

そして、儒臣千里は「搜古句、構成新歌」という方法を採用する。「搜句」は摘句と同義。中国では「搜句忌于顛倒」（文心雕竜七章句）「静慮同搜句」（全唐詩七四九、李中「宿青溪米処士幽居」）等、広く行われており、数種の佳句撰も逸早く舶載されて来ている（見在書目録）が、それらの内古今詩人秀句は屏風に書かれたりもした（性靈集三「勅賜屏風書了即献表」）。千里の頃になると、本朝詩人の間でも摘句はかなり行われていたらしく、口有文章摘古詩 古詩何処閑抄出

（菅家後集「詠、采天北窓三友詩」）

然則或有識之人、撰、文書之艶句、詠、當時之美、機、或秀才之者、取詩章之麗言、讀、梅柳之何恰。（新撰万葉集下巻序）等の例が見える。その後、西宮記や江家次第の釈奠・九日宴条に詩席における佳句の推重を窺わせる献盃の儀が度々注される事からも、部分的雕琢への賞美の風が偲ばれるが、このような断章

的享受の傾向が制作の面にまで及ぶと、そこに句題的発想をも生じる。

凡作詩之人、皆自抄古今詩語精妙之处、名為隨身卷子、以防苦思。作文與若不來、即須看隨身卷子、以發興也。

（文鏡秘府論南巻論文意）

は一つの便法だが、我が国の詩人たちの参考とした所でもある。摘句によって詩興を触発する事例には次のようなものもある。

縦容之次宿侍之間、引經伝以發轍情、抽章句以催文思。（文章九「請、特授、從五位上大内記正六位上藤原朝臣菅根」）

状）

文人達は頻繁な詩筵での需要に応ずるべく、古今の佳句を詩囊に貯え、詩想を練るための方途とした。千里の場合は、白氏文集を中心に抄い集めた句に「構成新歌」したのである。「構成」は本位田氏の言う通り詩句と歌とを「組合せる」という事で、「先生非、帝賞、和歌之佳麗、兼亦綴一絶之詩、挿數首之左」（新撰万葉集上巻序）の「挿」と変わりはない。摘句とそれに番われた歌とが同等の比重を持つ事も新撰万葉集における詩と歌との関係と同様だろうが、その対偶の様相は同質ではない。

新撰万葉巻頭の

水の上にあやおり乱る春の雨や山の緑をなべて染むらん

は

春来天氣有何力、芳雨濛々水面敷
忽望遅々暖日中、山河物色深染緑

の七絶に置き換えられるが、起句はいわば導入部で舞台を提示し、承句で主材である春雨の細叙へと移り、転句は遠景に転じるつなぎの句、そして結句の核心を導出するという結構である。次の作もほぼ同じ成立だろう。

散ると見てあるべきものを梅の花うたて句ひの袖にとまれる

和風触処物皆染 上苑梅花開也落

淑女偷攀堪作簪 残香句_レ袖_レ孤難_レ却

和歌の上句・下句がそれぞれ詩の二句四句に対応し、全体としては翻案の域を出ないが、情景描写は微細になり、和歌表現は一旦分解されて七絶に再構成される。千里集がそのような面倒な手続きを踏まないのは、七言句の包含する意味内容がほぼ和歌一首の表現量に相当するという理由もある。新撰万葉の場合、歌から詩への転換は、本来歌の持つ一首全体に渉る強固な意味的結合が絶句形式に基づく個々の場面への分断によつて切り捨てられてしまう結果をもたらすもので、その意味で完全な対偶関係にはないのに対し、句から歌への転換は、詩の一場面がそのまま一首の和歌となりうる点において、一層両者の等価性を強調するのである。

咽_レ霧山鶯啼尚少

山深みたちくる霧にむすればや啼く鶯の声のまれなる

花下忘_レ帰因_ニ美景_一

(千里集春)

花を見て帰らむことを忘るゝはいろこきかぜによりてなりけり

(同)

千里集の作歌技巧は金子氏の著書に詳述されているが、右に掲げた作はその作歌姿勢を典型的に表わしたものである。程度の差こそあれ、全体に亘つてこの直訳的態度は一貫しているのである。その中であつて、

唯残半日春

ひとゝせにまたふたゝびも来じものをただ日かなこそ春は残れる

(春)

などは高遠集の

惜しむとや空のけしきも思ふらんいりあひの春に残れるとそれほど遜色のない作と言えるかもしれないが、その主たる要因は、もとになる居易の句自体が原詩の要の位置にあつて全体の詩想なり感懷をその一句に統合・凝縮する働きを持つものであつた点にあり、その事が歌にもなほどうか抒情性・詠嘆性を帯びさせたのだらう。逆に前掲の二首の無味乾燥ぶりは、句自体が本来原詩の叙景的・説明的部分に過ぎなかつた点に最大の理由を持つ。いずれにしても、それだけ句への依存が強いのである。

月照_ニ平沙_一夏夜霜

月影になべてまさごの照りぬれば夏の夜ふれる霜かとぞみる

(集夏)

夏の夜の霜やおけるとみるまでに荒れたる宿を照らす月影

(寛平后宮歌合夏歌)

風翻_ニ白浪_一花千片

沖つよりふきくる風は白なみの花とのみこそみえわたりけれ

(集風月)

秋風の吹上に立てる白菊は花かあらぬかなみのよするか

(古今秋下272道真)

金子氏が同出典として上げるものである。道真のものは寛平内裏菊合の歌。吹上の浜に見立てた洲浜につける。眼目は菊花の賞美にあり、白詩句の利用は静的な対象に特定の場面性を賦与して総合美を形造るための一つのたてに過ぎない。同次元で両者を論評するのは無意味と言うべきだろう。千里の歌は全面的に詩句に依り懸り、そこから一步も離れない。一首の佳句それ自身は決して表現対象としても自己完結しているものとは思えないが、抒情の断片化・細分化はむしろ時代の指向する所でもあったのである。

この時期の献歌の状況を見ると、千里の場合に類似するものとしては、古歌に自作を付した興風の例(古今秋下310・後撰春中73)を見出すだけである。興風の趣向は、

寛平御時古き歌奉れと仰せられければ、竜田川紅葉ば流るといふ歌を書きて、その同じ心をよめりける

深山より落ちくる水の色見てぞ秋は限りと思ひしりぬる

(古今310)

と、古歌「竜田川紅葉ば流る神南備の御室の山に時雨ふるらし」を恰も一幅の絵画のように見立てた屏風歌の発想をとるもので、単なる古歌の焼き増しではなく、自歌に主張がある。それに較べ、古句を引き写したに過ぎない千里の歌は、詩に対して従属的な位置に甘んじているものと言わねばならない。そこには歌独自の創造は見られず、あるのは優美典麗な佳句の世界である。

千里集巻末に付された詠懐十首は

春／＼にあひてもあはぬ我身かな花雪にのみふりまさりつゝ
年ごとに春秋とのみかぞへつゝ身はひとときにあふよしもなし

のように全て不遇の訴嘆詠であり、奏状には「自詠十首」と言う。詠懐詩は阮籍に始まり、白氏文集にも多数を見るが、我が国では「述懐」の詩題が懷風藻以来用いられ、「詠懐」は良香・道真に漸く現われる。その内容は、「有_レ詠_三其懷抱之事_二為_レ興是也」(秘府論南卷論文意)と説明することく、相当広範圍に及ぶものと言つてよい。「自詠」は中唐詩人盧仝が初例と思われる(全唐詩三八七)が、多数の作品を残すのはほぼ同時期の白居易である(後集一・五・七・十一・十二・十四・十五・十七)。それらの詩は全て老醜や生活苦を詠ったもので、自己の現状を否定的に客体視している点に特色があり、詠懐よりは範圍が狭い。日本の詩人では忠臣・道真に「自詠」の作がある。特に次の忠臣の詩の頸聯は、千里の不遇意識に通い合う所がある。

不_レ厭吟諷欲_二終_一年 自課初知自然性

祝_三着聖年_二三百首 贊_三米良史_二半千篇

学耕何必逢_三元吉_二 詩癖曾無_レ入_三十全_二

形相亦非_三苞食肉_二 欲_レ抛_三筆硯_二更何縁_一

(田氏家集中)

更に、千載佳句が人事部に「自詠」項を設け、「自嫌野物将何用 土木形骸麋鹿心」という白詩「中書寓直」中の一聯を載せるのも、自詠詩への通常の理解を示すものと言えよう。また、詠懐

詩、自詠詩の一つの特徴として、晋支遁の詠懷五首・陳張君祖の五首・北周庾信の二十七首・杜甫の五首・五百字・一百韻とか、盧仝の自詠三首・居易の五首という具合に、連作の体裁を持つものや長詩の多い事が上げられる。千里の詠懷十首もそういう体裁に倣いつつ、同時代の文人達が詠んでいた自詠詩の自己表白を歌によって行っているのである。

奏狀の記名によると、この時千里は散位從六位上。最も官位の沈滞に呻吟している時代である。献進の下令は恰好の訴嘆の機会であり、その際に千里は古句と新歌との対偶という方法で、勅意に逆らってまで自己主張を試みた。和歌に関しては相当の実績を持ち、また献歌の勅詔を受けた事自体が「倭歌しれる人」（前掲貫之集詞書）との当代の評価を裏付ける事柄であってみれば、千里が古歌近詠の蒐集に殊更手を焼く筈もなかったと思われる。詰る所、歌人としての評価はどうあれ、学儒としての不遇意識がその作を生んだのではなからうか。道真や父音人の例が象徴するように、文章道の素養がまだある程度実社会的効力を残している時代である。「散位從六位上」の千里が、儒門の出自たるにふさわしい官職を望まんがために、敢えて「儒門余孽」という事を表面に押し立て、そこに改めて自らを据えた上で、儒家的文学観から和歌をおしなべて「艶辞」と規定する事によってこれを編集の第一義の対象から斥けるという手続きを取り、自己の儒者的力量の顯示を目的に佳句を博搜、漢詩集の体裁に部類し、更に勅意に添うべく新歌を対偶させたのが、この異色の作品だろう。そこで和歌は千里にとっては副次的因子であったために文学としての

主体性に乏しく、さしたる発展性も影響力も内包してはいないが、一面では佳句の愛好と新撰万葉に代表される「和漢」の風潮という、時人の嗜好に投ずる形態でもあったと言えよう。

千里集はその組織的形態、前後に例を見ない新奇さによって、後世から大いに注目された。だが、その成立事情を見る限り、このような作品はあくまで一回的なものであり、類例を連続的に生み出す事もそれ故になかったのだらうと思われる。なぜならば、そこに垣間見られる両個性は千里という儒者歌人の個位的位相に根ざすものでもあり、かつ、その歌に見る自立性・創造性の欠除は、享受対象としてならともかく、作る方の側にとっては全く興味を惹かれるような性質のものではなかっただらうからである。醍醐朝に生起する句題和歌が、明らかな詩と歌との交渉の下で、句題詩に対する句題和歌として明確な方法意識を具えつつ、宮廷文学として出発し、次第にその制作階層を拡げて行ったのを見る時、千里集という存在が当時にあつてもいかに奇型的・偶発的なものであつたか知られるだらう。無論前者も当初は詩に随伴する形で取り上げられる事が多かったのだが、実作を重ねるごとに徐々に一個の和歌的方法として練磨され、歌人間に定着して行くのである。千里集は宇多朝という特色ある時代の時代相の一つの反映であり、儒者であり同時に歌人であつた作者の実生活の矛盾から生まれた産物とも言えようが、直接的な影響力を同時代に及ぼす事はなかった。この集の「句題和歌集」としての評価は後代に俟たねばならなかったのである。

注(1)

この間の擬古詩・擬古楽府から句題詩への発展とその性格に関しては、小沢正夫氏の増補版『古今集の世界』第九章「句題考」にまとまった解説がある。

(2) 『古今集の基盤と周辺』第七章・『王朝和歌史の研究』

第二章第四節

(3) 歌仙家集本躬恒集及び拾遺集(雑秋1106説人不知)では「延喜十九年」とするが、歌仙家集本は延喜六年に没した定国の四十賀を同十四年とする等誤記が少なくなく、拾遺集も屏風歌とする点に不審があり、一応西本願寺本の記載を採っておく。

(4) 句題出典未詳。道長東三条院での同題による詩が本朝麗藻上・江吏部集上・類聚句題抄に見える(文粹八に匡衡の詩序がある)ので新題ではない。李太白集十九「宣城青溪」に「青溪勝三桐廬」水木有「佳色」の類句がある。

(5) 前掲橋本氏著第一章第三節

(6) 山岸徳平氏「漢詩集と勅撰和歌集との関係的背景」(山岸徳平著作集Ⅱ『和歌文学研究』所収)

(7) 金子彦二郎氏『平安時代文学と白氏文集——句題和歌・千載佳句研究篇——』

(8) 目崎徳衛氏『平安文化史論』所収「在原業平の官歴につ

いて」注3には、年齢的に見て採だろうとしている。

(9) 和漢兼作集八秋下に「和三大卿善詩伯暮秋之作」の零句。また、野口達氏旧蔵扶桑古文集に和歌真名序を載せるといふ。(川口久雄氏『平安朝日本漢文学史の研究』第二十四章第八節)

(10) 『王朝歌壇の研究——宇多醍醐朱雀朝篇——』第一編第六章第二節

(11) 書院部本の「寛平九年」、類従本の「散位従五位上」の不
当な事は前掲金子氏著を参照。

(12) 勅撰作者部類には二十五首。千里集から説人不知あるいは赤人作として採られる歌六首(金子氏前掲著)。新古今秋上405は深養父集にあり、六帖にも深養父作とする。風雅雜上1576は歌題・歌調からして千里の時代の作とも見えな
い。前者は検討を要するが、新古今以下の入集歌はこの二首以外全て現行千里集からなので、一応この二首を除いておく。

(13) 村瀬氏前掲著第二章

(14) 本位田重美氏『古代和歌論考』所収「大江千里の『句題和歌』」